

奄美方言の小学生向け映像教材の開発と その活用法についての研究

研究代表者：前田 達朗
(東京外国語大学国際日本研究センター准教授)

共同研究者：高嶋 朋子
(東京外国語大学国際日本研究センター研究員)

研究成果論文

はじめに

本研究が目指したものは、大きくふたつあった。ひとつめは奄美語瀬戸内方言の教材を作成することである。さらにその過程を記録することは、今後同様の試みがなされるときの助けになるだろう。ふたつめはユネスコの「危機言語」にも指定され、伝承が危ぶまれている奄美語瀬戸内方言の記録をすることである。

本報告はこれら目的の達成を検証するために、制作の意図と過程をふりかえる。

なお「シマグチ」とは、奄美全域で使われる地域言語の呼称である。後に詳述するが、この言語（群）の総称として「方言」ということは避けたい。そのうちの奄美大島南部と三つの島嶼部にまたがる地域の比較的距離の近い変種を「瀬戸内方言」と呼ぶことにする。

1. 研究の背景

1.1 歴史社会的背景

ここでは言語共同体としての奄美と奄美語について理解するべく、歴史社会的背景について概括する。

奄美とシマグチの歴史を理解する上でその起点とするのは、1609年に始まった薩摩による植民地化である。軍事侵攻の結果、奄美群島は薩摩の支配下にはいる。薩摩は高い価値を生むサトウキビの単作を強制した。年貢を黒糖で納めさせるのである。そのため、もともと山がちな地形で、少ない耕作可能地のほとんどがサトウキビに充てられ、島民の食料に大きな制限がかかる。簡単に深刻な食糧不足が起こり、餓死者も出た。いまもなお薩摩時代の圧政は、飢えの記憶として語られる¹。過酷なノルマが生み出したのは餓死者だけではなかった。薩摩に設定される「換糖上納制」の要求を達成できなかった農民は、返せない借財をかさね、ついには「ヤンチュー家人」と呼ばれた債務奴隷層を生むことになった。琉球時代から引き継がれた身分制度は、奄美人の中に支配層と被支配層の対立を生む。島民の生活必需物資の流通も薩摩が独占する、明治以降も鹿児島が奄美から収奪する構造はかわらなかった。1940年まで「独立経済制」がとられる。これは奄美の税収で行政をまかなえというもので、偏った産業構造を強いられてきた奄美にとっては「切り捨て」で、国庫補助金も入ってこなかった²。

1 前田達朗 (2006) pp11-12

2 西村富明 (1993) 第二章

1.2 方言矯正と移民（移住）の経験

慢性的な余剰労働力と経済の疲弊は、大量の移民を送り出すことになる。その顕著な例は1920年代半ばを頂点とする阪神工業地帯への移動であった。当時日本最大の生産高を誇った工業地域では大量の労働力を必要としていた。植民地朝鮮や濟州島、沖縄とともに直通の航路で結ばれた大阪・神戸に移住者を送り出し、それらは今日にも続く奄美群島出身者コミュニティの基盤になっている。こうして出稼ぎ依存型の経済構造が形作られる。移住先での被差別経験は、「方言」を使わせないことを正当化する言説、たとえば「方言しよったら朝鮮人とまちがえられっど」などとして、いまでも残る。

奄美で、本土で「本土復帰運動」の際にも、同じような環境にあった朝鮮人や沖縄人とは違うことが強調され、その際に「方言」は「正しい日本人」であることを主張する妨げと考えられた。

また奄美現地の学校教育の現場では、「方言矯正」が行われた。明治期から記録はあるが、組織的に大きな規模で行われたものは、国民学校令下の太平洋戦争期であった。教員自身に求められた「標準語」の知識がなく、「方言」を禁じる方向へと傾倒していく³。そして本土の日本人以上に日本人であることを求め⁴、相互監視と罰を与えるという方法で暴力的な「方言矯正」が奄美人教員の手で行われた。米軍政下では、「方言」は、本土復帰のためには忌むべきものとしていっそう抑圧された。

1.3 言語意識と「シマグチ」伝承活動

本研究を着想したのは、シマグチの伝承に寄与できるものはなにかということを考えはじめたときであった。

これらの歴史社会的背景から、「矯正すべきもの」と考えられていた奄美語は、これまで「方言」としか呼ばれることはなかった。「方言札」を象徴とする沖縄での苛烈な方言矯正については知られるところだが、奄美では現象面では類似するが、より複雑な背景を持つ。人口がほぼ沖縄の1/10の奄美は、鹿児島島の施政下にあり、独自の政策をとる権限もない。奄美のことばを「方言」と呼ぶことについては、単に地域変種という意味以上のものを背負わせていることは明らかである。自分たちのことばを「方言」としか呼べないような経験が、自分たちのことばを「矯正すべきもの」と考える言語意識の基盤になっていることは間違いない。従って本研究では、計画書では「奄美方言」としたが、それ以降方言とは呼んでいない。シマグチは特定の言語を指す呼称ではないかもしれないが、地元での通用度も考えてタイトルにも用いた。

3 前田達朗 (2013) p31

4 前利潔 (2004) p33

伝承活動の始まりについては、いつとははっきりしないが、1970年代後半から80年代初頭にかけて、シマグチを使える子どもがいなくなったことに危機感を持った人々が行動を起こしたといわれている。これは「方言札」が奄美群島で最後に確認された時期とも一致する⁵。今回フィールドとした瀬戸内町でも小さな単位、たとえば個人や集落で80年代から子ども向けにシマグチを教える試みがなされていたが、その状況を大きく変えたのは1994年に「子ども島口大会」が始まったことである。学校単位で代表を送り出すことになり、各集落での活動にひとつの目標ができた。学校との協力関係はこの事業において重要であるが、大島郡出身以外の教師にとっては、地元で丸投げしてもいいものでもあった。しかし、それ故に、教え手がいて子どもがいれば、集落の公民館活動としては格好の題材であったともいえる。しかし特に教材や教授法があるわけでもなく、集落の人々の自助努力によって活動は成り立っていた。この状況に今回の「教材作成」を目指した研究の出発点があった。

2. 制作までの経緯

ここでは、本格的にコンテンツ制作にとりかかるまでの経緯を述べ、個別の事例および教材全体の構成の理解の助けとなることを目指す。

2.1 編集委員会の構成

制作にあたって編集委員会を組織した。その目的は制作の主体をあくまでも地元瀬戸内町に置くことであった。これはこれまで前田の伝承活動の研究において理解できたことなのだが、その主体が行政などではなく、集落の人々の個人的な努力に依っていることへのオマージュでもある。我々研究者はあくまでその一部として関わっているという姿勢を、形式的にも示す必要があった。そして、瀬戸内の人々に自分たちがこの教材作成においても主体であることを自覚してもらい、忘れられないための手立てでもあった。これらの目的は委員会の編成で概ね達成できたと思う。

瀬戸内町在住の編集委員は、以下の人々である。(敬称略)

徳永允（とくながまこと） 与路出身で古仁屋在住。中学校教員として大島郡、特に瀬戸内町で勤務。定年後瀬戸内町立中央公民館館長を務めた。教員時代からシマグチをはじめとする文化の継承活動に力を入れてきたが、公民館館長時代は子ども向けのプログラムや、「子ども島口大会」の運営に深くかかわる。現在もなお囑託として教育現場に立ち続けている。シマグチ伝承活動のキーパーソンの一人である。

袴一男（いのりかずお） 俵集落で伝承活動を主導的に行ってきた。近年はメンバーの高齢化と子どもの数の極端な減少（2013年度より俵小学校は休校）により活動が止まってい

5 西村浩子（1998）

だが、観光客や研究者、大学生、町内の成人を相手に歴史や文化の案内や講演活動をしている。中学生のときに敗戦とともに旧満州から母親の故郷である俵に引き上げ、そこからシマグチを学んだ経験もあり、氏の知識や経験は記録しておく価値があると考えた。

林京子（はやしきょうこ） 諸鈍集落で長い間子ども向けのシマグチ伝承活動に従事していた。出身は諸鈍ではなく、結婚を機に住み始める。積極的に地域活動に関わりながら、諸鈍という歴史と伝統に自負の強い集落を女性のそして外側からの視点で見ることできる。

計省造（はかりしょうぞう） 篠川集落で、「区長」と呼ばれる行政から囑託される集落のまとめ役を長年務めた。男性には珍しいのであるが、生まれた篠川を離れたことがない。集落の成人・子ども向けの文化活動や、伝統行事の中心的役割を担っていることは区長職を後進に譲った後も変わっていない。

町健次郎（まちけんじろう） 瀬戸内町立図書館・郷土館学芸員。民俗学を専門とし琉球大学で博士号を取得。町内の原資料を丹念にあたり、地元にも根ざした研究活動は、地域住民の理解と支援を受けている。また大学などの研究機関がない奄美においては、外部の研究者からも大きな信頼を得ている。今回のプロジェクトも企画段階から助言を求めてきた。彼の町職員としての行政側とのネットワークと、町内の人々とのフィールドワークを通じて築き上げた人脈に本研究は大いに負うところがあった。

岩元剛（いわもとつよし） 古仁屋出身。高校卒業後専門学校を経て東京で映像の制作会社に勤務した経験を持つ。帰郷後個人プロダクションを運営。映像の撮影・編集を仕事としている。また映像作家としても活動しており、鹿児島放送の「ふるさとCM大賞」を2012年に受賞している。このような若い才能が、瀬戸内町にいたことは幸運であった。

これら瀬戸内町在住の6名と、共同研究者の高嶋朋子を含めた8名で、「瀬戸内のシマグチ」編集委員会を結成した。誰が「長」であるかを決めなかったのも編集委員会を設定したのと同じ理由である。

2.2 集落の設定

誰を編集委員会メンバーとするか、というのを考えることは、どこの集落を題材とするのかをあわせ考えることであった。瀬戸内町は1956年に古仁屋町（東方村）、西方村、鎮西村、実久村が対等合併してできた行政区分である。しかし、旧来の区分けは人々にいまでも意識されている。ひとつにはかつてはそれぞれに村落共同体の集合体があり、それぞれの「中央」があったものが、古仁屋に行政・経済の中心が移ることで、それぞれの集落が

衰退したと考えられているのも一因である⁶。シマグチはもちろん集落共同体—シマーと深く結びついている。シマグチの「違い」も意識され、折に触れて強調される。この「地域性」については、うまくバランスがとれたと考える。取り上げる集落を決めた理由は、ここで簡単にまとめると以下のようなものである。

篠川はいまでも比較的大きな集落であるが、際だった特徴はないが産業農林水産すべてがあり、古くからの集落共同体の雰囲気も残っている。シマの「サンプル」としては最適であると判断した。

古仁屋は、港町として産業の中心として人口を集めた。ほかの集落と違って都市化した地域といえる。町の成り立ちの経緯でも触れたが、ほかの集落とは大きく違う特徴である。

加計呂麻島の諸鈍は、「諸鈍シバヤ」でも知られるが、シマグチが生活の中に存在し、歴史・文化的なコンテンツが豊富である。同じ加計呂麻島だが、旧村としては別の村である俵は、集落としても古く、集落民の手による民俗資料室があり、これを活かしたいと考えた。与路島は、人口が激減している。与路のことを記録するとすれば急いだ方がいいと考えた。もちろんこれらの集落を決定するにあたっては、もうひとつの重要な条件、協力者が得られるかどうかがあった。

これらを総合的に判断し、上記編集委員会メンバーに協力を依頼した。

2.3 篠川での習作作成と編集会議

編集委員会への参加を個別に依頼しそれぞれ快諾を得たが、企画を説明しながら、特に集落の編集委員には具体的なイメージが必要なことがわかった。そのために、全体の編集会議を持つ前に、篠川集落で「パイロット版」を一度撮影することにした。

「瀬戸内のシマグチ」の集落ごとのコンテンツは、大きくみつつの部分に分かれている。スクリプトを書いて演じてもらう「会話」とそこから取り出した重要事項を確認する部分、集落の紹介、そしてその集落に独特のものを取り上げる部分である。ここでは、制作中に我々の間で呼んでいたように最初の部分を「教材」（「会話」と「取り出し」）、次を「集落紹介」とする。最後のパートについてはそれぞれ題材で呼んでいた。その詳細と狙いについては節を改めて述べる。取り急ぎこれらみつつのパートを篠川で撮影し、ラフ編集をして、編集会議に臨んだ。

撮影できたのは、「教材」部分と「集落紹介」であったが、イメージを結んでもらう効果はあったといえる。

5月26日に瀬戸内町立図書館で第一回の編集会議を開催した。目的はそれまでに個別に

6 2006年に全島一市を目指した「奄美市」が市町村合併によってできたが、瀬戸内町は合併協議に反対の声が当初から大きかった。この「経験」によるものと地元ではいわれている。

説明はしていたものの、もう一度全体的な構想を説明し、その材料として篠川の仮編集版を見た。そして、ほぼ全員が既知の間柄ではあるが、編集委員としての顔合わせであった。当日の資料は章末に資料として添付する。そのほか出た意見と議論は、まとめると以下のようなものである。

- 「うまい人」に出てもらうべきだ

これは、シマグチの言語状況につながる話でもあるが、いまシマグチを話すことは、特別な場面と結びつく。すなわち、話者が少なくなったため、コミュニケーションの手段としてではなくイベントなどで披露するもの、儀式や芸能のものになってしまっている。編集委員の一部にも、記録し保存すべきは、「名人」のシマグチであるという意識があるようで、うちの集落ではお年寄りの名人を揃えようというコメントがあった。後に詳述するがこれは篠川編を見てのものであるが、「上手ではない」個人を積極的にとりあげてことを考えていることを伝えた。

- 敬語の扱いについて考えたい

シマグチを考えるについては、避けては通れない課題である。結論をいうと最後まで「揺れ」があった。複雑な待遇表現の体系を本来持っていたシマグチであるが、それらは身分制度にも関連しており、現在では母語話者にも説明ができない部分がある。敬意が過ぎない表現を使うことを求めるにとどめたが、全体を通じて共通の見解を編集委員会全体で持ち得たとは言いにくい。従って本教材の中での「敬意の高さ」は、各個人でも厳密に言うとは揃っていない。

- シマの紹介は、文化財などよりも、いまの生活について積極的にとりあげる

名所や旧跡、歴史的なものの紹介で最初の篠川の集落紹介は構成されていた。これは篠川の計氏が、外からやってくる人相手に説明をしたり、町の行政から求められて集落史のようなものをまとめ、書いたり話をしたりした経験によるものである。しかし、これらのうちに個人の業績を顕彰するもの、解釈が分かれるものなどはあえて扱わない方がいいという意見が、町氏から出された。なによりも昔語りばかりになってしまっははこの教材の主たる対象である児童生徒にとって退屈なコンテンツとなる可能性があった。現在も実際に見られるものにも積極的に触れてもらう必要もあると考えた。

そのほか解決すべき技術的な課題も見つかった。「習作」としてしまうと篠川の協力者に申し訳ないが、この過程を経たことで大きな進展があった。またテキスト化する際のか

な表記については、編集委員それぞれの表記法をできるだけ尊重することを申し合わせた。無理な統一はしないことにした。

3. 構成について

本章ではこれらの経緯を経て最終的に確定した「瀬戸内のシマグチ」の全体的な構成について、制作の過程の記録を概括する。

3.1 集落篇

前述の通り、5つの集落を題材に制作したものは、大きくみつつのパートに分けた。ここでは5集落に共通の制作の過程をまとめる。

3.1.1 「教材」

会話を中心としたいわば「教材仕立て」のパートである。たとえば語学教材であれば、文法事項を設定し、それを盛り込むことが最も重要になる。さらに習熟度を考え、簡単なところから複雑なものへと積み上げていく。たとえば日本語だと名詞文から述語文、単文から複文へと進んでいく。多くの語学教材が「つまらない」のは仕方のないところもある。「瀬戸内のシマグチ」についても当初はこの手順を踏むことを考えたが、単発に終わる可能性もある中で、こうした手順が優先させるべきものかということを検討した。そのため文法事項ではなく、その集落を舞台にして不自然ではなく、かつ使う可能性が高い表現をまず考えた。序数、移動、指示詞、親族呼称、基本動詞、疑問詞、地名を盛り込むことを考えた。かつ子どもが興味を持てるようなコンテンツにするべく、話として完結し、ストーリーがあることを目指した。まず前田が素案としてスクリプトを日本語で作成、集落の編集委員に翻訳を依頼し原稿を作成、それをもとに検討を重ねた。台本を演じてもらう形になるわけである。本編ともいえる会話に引き続いて、重要事項を取り出した部分の構成は前田が主導的に作成した。

3.1.2 「集落紹介」

今回の研究計画のもうひとつの重要な柱が、シマグチの記録である。「教材」が演じてもらう部分だとすれば、ここはできるだけ自然な談話を取り入れたいと考えた。この部分については、最初から編集委員を主体としたそれぞれの集落に依頼した。これは既述のように、地元の人々に主体性を持ってもらうということと、スケジュール的な関係で、我々が不在の間にも製作がすすむ部分が必要であったためである。篠川の仮編集のところで述べたが、過去の話だけで全体を構成することは避けたかったが、それでもそれぞれの集落の現在につながる歴史をないがしろにするわけにはいかない。「集落のいわれと、歴史、現在の産業」について話をしてくださいという大きな枠だけを設定し、そのほかはできるだけ

編集委員が準備したものを尊重した。この部分の最大の難関は書き起こしであった。「教材」では文字化を前提として、シマグチ訳も予め用意できたのだが、それぞれ自然になればなるほど、自身の話したことも含めて、文字へ、あるいは日本語への翻訳が困難であった。編集委員の多くが「母語話者」ゆえの行き詰まりであったが、製作を進める中で介入できるようになってきた。

この部分はもちろん、単なる記録ではなく、シマグチ教材として、読み物としてあるいは郷土のことを知る手がかりとしても十分に役立つものになったと考える。

3.1.3 集落ごとのコンテンツ

このパートは、一般化しにくいところである。共通しているのは、とりあげるべき題材を含めて誰が主導するということなく話し合ったということである。詳細はそれぞれの集落の事例で触れる。

3.2 芸能篇

芸能篇を企画したのは、奄美では、伝統文化が子どもたちに近い距離にあり興味をひくコンテンツであること、そして特に若いアーティストの姿はさらにその距離を近づけるであろうと考えたからであった。また諸鈍集落だけでなく瀬戸内町が誇る伝統芸能「諸鈍シバヤ」を扱わないわけにはいかなかった。この篇については、ここで詳細を述べておく。島唄については、瀬戸内町出身のアーティストに出演を依頼した。「諸鈍シバヤ」については、2012年10月12日のものを撮影、編集している。

西和美（にしかずみ） 西古見生まれのベテランの唄者であり、もはや重鎮である。出演を快諾してもらい、出身地の西古見の「豊年祭」での撮影がなかった。

里朋樹（さとともぎ）、歩寿（ありす）兄妹 古仁屋出身。現在ともに関西大学の学生である。ともにソロでCDも出しており、ライブ活動も数多くこなす。「瀬戸内のシマグチ」のために、大阪市内でライブ演奏をしてくれた。

徳原大和（とくはらやまと） 現在東京を拠点に活動している。諸鈍出身で、今回の企画に合わせて、東京外大でライブを行ってくれた。

いずれのアーティストも、本研究の主旨に賛同し無償での演奏だった。また曲の演奏と合わせて、子ども向けのメッセージも依頼、その模様も本編に収録した。ほかにも瀬戸内出身で在住のポップ・シンガーとしても全国的に有名な女性歌手の出演も探してみたが、所属事務所を通さなければ一切の露出ができない契約との連絡があり断念した。

テキストにはアーティストの解説のみを付したが、伝統芸能を知る教材としても使用に十分耐えるものになる。またそれぞれのアーティストのメッセージは、自由に話してもらったのだが、シマウタやシマグチが、故郷を離れた奄美出身者にとってどのような意義

があるかを偶然にも三組とも語ってくれた。

3.3 「島口ラジオ体操」

「島口ラジオ体操」の詳細については本編に詳しいので重複は避けるが、7月にCDが発売されてから瞬く間に奄美群島中で話題になり、地域・学校の行事で使われ、子どもたちもよく知るものとなった。制作にあたったNPO「環境教育協議会」も「瀬戸内のシマグチ」の制作意図を説明すると、使用を快諾してくれた。「瀬戸内バージョン」があったのは幸いであった。

このパートは当初は「古仁屋篇」の一部として考えたが、協議して全体のエンディングとして使用した。「オリジナリティ」という意味で議論になったが、たとえばシマウタも、かつては誰かの創作なわけである。早くも奄美のさまざまな場所の行事で使われ始め、今後もこの「島口ラジオ」体操が人々に親しまれるであろうことと、同じ時期にシマグチの復興を目指した別のプロジェクトがあったことに偶然以上のものを感じて、使わせてもらった。

4. 集落篇制作での問題点

ここでは未解決の課題も含めて、制作していく中で起こった問題を挙げ、今後同様の研究を行う際の参考にするべく報告する。

4.1 表記の問題

全集落に共通したが、本編をテキスト化することを決めてから制作・テキスト編纂の最後まで明確な解決に至らなかった課題である。既述の通り、集落の編集委員の表記法を尊重する、とコンセンサスをとったが、同一の個人の中での揺れ、あるいは編集委員の間での正しい・間違っている、の議論は続いた。もちろん正書法のない、あるいはかな表記がなじまないという意味ではある程度想定していたが、人の書いたものが気になる、あるいはどうしても受け入れられない、という点については、想像以上だった。また、文字化の経験のない編集委員も複数いた。第一回編集会議では地元編集委員のうちの一人に「表記の統一」を依頼していたが、以降の地元編集委員同士の関係と作業の効率を考慮して、前田・高嶋が責任を持つという方針に途中から変えた。制作に入る前に奄美方言の文字化の経験がある研究者に方法をたずねたが、なにが正しいかという議論には意味はないとのことであった。この点については同意せざるを得ない。

今回のテキストを通じて、完全には「統一」がとれているとは思えない。あるいは学習者に混乱や負担が起るかもしれない。表記については実際に使用してもらってからの

フィードバックを待ちたい。その中で解決策を探り続けることも手がけた者の使命である。

4.2 翻訳の問題

編集委員やその周辺の協力者は、伝承活動に関わった経験はあるが、それまでの経験は様々である。もちろんシマグチを教えるプロは存在しないのだが、教員経験者も含め教育歴や職歴など様々で、それぞれの集落での取り組み方も様々であった。実はこうしたそれぞれの経験の違いが最も現れたのが、日本語共通語とシマグチの間での翻訳であった。おそらくは外国語の学習経験によると思うが、どうしても母語である話し言葉のシマグチと、それを書き言葉とするということが結びつかないという現象が起こったのである。少なくとも「日本語」において話し言葉と書き言葉の距離を経験することが少なくなった現在、想定しにくい事態であった。

4.3 「できる」ということ

まず強調したいのは、第一回編集会議についての部分で触れたように、母語としてシマグチを獲得した世代が少なくなったいま、「学習言語」としてシマグチを身につけた人々が存在することについての地元での理解が行き渡っていない、ということである。篠川と諸鈍の集落紹介をしてくれたのは、それぞれ地元での生活経験の短い人であった。年代も話者の中では比較的若い。それでも編集委員の依頼で協力をしてくれた人々であるが、明らかに様々な違い、たとえばアクセントが日本語寄り、音声的な変異、などが見られる。しかし、これも現在のシマグチの状況を現す記録であるとともに、若い世代にとっては、学習によってこのレベルまでくることができるというロールモデルである。また、30代の出演者については、その場で「口移し」で覚えてもらうというような場面もあった。彼らの生活言語は日本語を基層とした現行の方言である。しかし、独特のアクセントやイントネーションなどは身につけており、その場で覚えることが可能であったということは、シマグチの習得は可能性があるということでもある。

古仁屋篇の秦珠奈さんは、中学二年生（当時）であったが、祖父母に主に育てられたためシマグチの相当の運用能力がある。「年寄りのつかうもの」というイメージがかなり強いシマグチに、こういった若い話者がいることを同年代の子どもたちが知ることは効果は計り知れない。

一方「シマグチの名人」として紹介された人が、シマグチでついに話せなかったという事例があった。古仁屋篇での集落紹介は、それぞれの出身集落の話をしてもらうと言うテーマだったが、ほかの参加者の前で「教養が邪魔をして方言で話せない」と言ってしまった。これを機に「話せないのに話せるふりをして、シマグチ大会の審査員までしてい

た人」という評価になってしまった。この人を非難するのは簡単なのだが、問題は別のところにある可能性がある。つまり、改まった場で日本語共通語以外で話をする経験や能力が誰にでもあるわけではないのである。前節の「翻訳」にも通じる問題である。年齢や生活歴から考えるとまったくシマグチの運用能力がないとも考えにくいからである。複雑な背景を持った言語を扱うにあたっては、こういったデリケートな問題が起こりうることを改めて記しておきたい。

4.4 時間の観念、進行のスケジュールについて

この項については、慎重に記述しなければならない。特定の個人やこの地域に共通のものがだらしない、ということと言おうとしているわけではないことを予め断っておく。たとえば奄美の人々が「島時間」と半ば自虐的に言うような話でもない。

どこで、どんな人が集まっても複数の人数が集まれば起こりうることだが、スケジュールに余裕を持たせたつもりだが、それでもかなりの負担をかけたと考えている。これは、書いたり、聞いたりという作業に慣れていない人々が含まれていたということだけではない。都市部の、あるいは大学周辺で起こりうることと別の時間の流れが存在することを、長年フィールドにいながら忘れていた筆者の失敗であろう。現地での滞在期間が限られる中、移動のコストは覚悟していたが、我々が日常的に用い、そのやりとりの速度で仕事の流れの計算をするものになっている通信手段が、ほぼすべての人にとって使わないものであったことも、別のコストを生んだ。こういう状況を知ってはいたが、理解できていなかった。こちらの焦りは確実に伝わって相手にストレスをかけていたはずである。計画が欲張りすぎていたとの批判も当たっていると思うが、それぞれの編集委員のスタンスを早くつかむ、こちらの意図を粘り強く伝える努力が必要であった。まとめると、前半で気を遣いすぎたあまり、後半より窮屈になる状況を作ってしまったということであろう。フィールドの人と「仕事をする関係」を再構築する難しさを痛感した。

また天候などの自然条件についても書き加えたい。ある程度覚悟はしていたが、撮影を集中的に行う計画だった9月は、毎週台風直撃された。スケジュールが大幅に狂い、撮影だけではなく会議も中止を余儀なくされた。交通や物流が遮断することもあり、予定をその通りにこなすことに想像以上の困難があった。

5. 集落篇の概略と解説

ここでは本編のメインの部分である集落篇の、それぞれの項目について、収録順に要約と解説をくわえる。以下数字は本編にならう。

まえがき

この映像教材を制作した編集委員会全体の意図するところを、まえがきとして子ども向けと大人向けの2種類用意した。教材自体、子ども向けではあるが、当然大人がこの教材を使う活動に関わるからである。

しのかわ（しのほ）へん／篠川篇

1-1 みてう うていたぼれ／みつつ売ってください

食料品店での買い物の場面。ここでのねらいは序数詞、指示詞の習得である。名詞文と疑問詞をふくめた文章を盛り込んだ。どこの集落にもひとつはある「よろず屋」的な商店での買い物という、日常的な場面を

設定した。すべてのプログラムの中で最初の撮影・制作であったため、音声の問題、長さ・量のバランスなど、解決すべき問題があった。地元商店の協力により撮影できた。

出演；計省造（編集委員）、計隆徳

1-2 ものと場所を指すことば／かずをかぞえよう

1-1でのポイントを取り出したものである。アニメーションを入れるなどのアイデアはその場で話し合いながら積み上げていった。

出演；勇和江、計省造

1-3 しのかわ（しのほ）ぬしょうかい／篠川の紹介

一般的な紹介、ということになったと思うが、ほかの集落においてもここでの形式が踏襲された。その意味で有用な習作となった。金井直利氏は年上の方に指導を受けながら話をしてくれた。シマグチ学習者の一例である。

出演；金井直利

1-4 八月踊り

すべての集落に独特の八月踊りがあるが、人口減や高齢化で行事が維持できない集落が出てきている。篠川は毎年盛んに行っているため、集落の人々の自負もある。しかし、今回収録した映像は最近のものではなく、十年前のものである。これは篠川集落側の強い要望であった。この十年前を最後に特に若年層の人口・参加者が減り、最後に大規模に踊った映像が残っていたからである。画質・音質ともに現在の水準からすると劣るものであったが、地域主導ということで、なにを見せたいかを優先することにした。



図1 作成した教材「瀬戸内のシマグチ」



図2 俵集落の「郷土資料館」で民俗資料を説明する禊氏（俵篇より）

2-1 くっりゃ むうだりょうおるかい？／これはなんですか？

ここでのねらいは名詞文のうちでも疑問詞、さらに「使う」「する」などの動詞と疑問詞とのくみあわせである。それと同時に俵集落の貴重な財産である民俗資料から近現代のシマの暮らしを伝えることを目指した。俵集落では編集委員でもある禊一男氏が語りもひとりで全部つとめてくれた。かつては老人会を中心に伝承活動のモデルとして紹介されたこともあるが、メンバーが減り、禊氏の判断でこの形態をとった。我々の想定とは違う形になったが、今後も特に小さな集落ではありうることである。

<p>2-1 くっりゃ むうだりょうおるかい？</p> <p>くん儀宗資料館 なくまぬちゅんちゅんが 毎日ていこうたん 至福め うん儀真ば みんなあていむたん どうろどうや。</p> <p>社会や どんどんどん便利になてい 儀宗め 至福だらう 儀宗に だん だんだんだん ちゅんちゅん いじやろが じゃんぼん むかしぬ ちゅん ちゅんが なまがでい ていこうたん うんどうぐ うんまま揃ていゆんむんな うっりやあにやもつたないくどうだらうが。</p> <p>じゃんからん むかしむかしぬ ちゅんちゅんが のほちゃん くん儀め文化 うん儀宗ば くまぬ儀宗 儀宗むかしぬ ちゅんちゅんが いさしやん生活を しゅたりやあろう 後ぬちゅんちゅんためちゅんもうてい くん いんさん儀宗あ ていん 儀宗め みんなが 儀宗 儀宗むてい がんしし 昭和61年2月に くま あえたんむんていやあ。またきゅんちゅんにや ゆっくり見りよ。</p> <p>A-1: くん儀宗や むうしゅんむんかい わかゆんにや？</p> <p>B-1: むうしゅんむんかい？ くまはら むうかい いていつきゅんむんな あ らんかい？</p> <p>A-2: あらんどや。くまはら わら入れてい くっりゃ わらなわばのうゆん 儀宗どお。わけていな？</p> <p>B-2: あんうしりょうなん わらう儀宗真にしゅんむんぬ あれいつが あつりや儀宗真な儀宗なん てうてゆんむんだりょうおんにや？</p> <p>A-3: がんしど。うっりやゆんぶ 儀宗はち てうてゆん どうぐど。</p>	<p>2-1 これはなんですか？</p> <p>この儀宗資料館は、この島の入道が、毎日使っていた至福の良真をたくさん集 めたところだ。</p> <p>社会はどんどん便利になって、シマの生活も儀宗にだんだん近づいていったで しょう。しかし、むかしの入道が今まで使っていた良真をそのまま揃てしま うことは、それはあまりにももったいないことでしょう。</p> <p>だから、昔の入道が残したこの島の文化、遺産をここに保存し、昔の入道が、 どのような生活をしてきたのか、後の世の入道のためにと思い、この小さなシマ だけど、住民のみんなが色々な話を集めて、そうして、昭和61年2月にオー プンした資料室です。また来る時は、ゆっくり見て下さいね。</p> <p>A-1: この儀宗はなにをする儀宗かわかるかな？</p> <p>B-1: なにをするものかなあ。ここからなにか出てくるものではないですか？</p> <p>A-2: ちがうよ。ここからわらを入れて わらなわをなう儀宗だよ。わかった？</p> <p>B-2: あの後ろに たくさんの儀宗真の箱な箱があるけど あれは儀宗に使うも のですか？</p> <p>A-3: そうだよ。それは全部儀宗真に使う良真だよ。</p>
---	--

図3 集落紹介は、シマグチにとどまらずシマでの暮らしを記録することを目指した（俵篇より）

2-2 瀬戸内のシマの名前

袴氏の得意分野でもある民俗史のうち、漢字の地名が本来であると誤解されていることの多い地名をとりあげた。歴史的な変遷や異説もあるところだが、ひとまず「平凡社 地名辞典」と袴氏の知識との突き合わせ、町健次郎氏との議論の中で現存の集落の旧地名を網羅した。

2-3 ひゅうぬしょうかい／俵の紹介

ここでも「市井の研究者」といえる袴氏の、特に自然信仰やノロ信仰についての知識が発揮された。民俗資料として貴重な語りだと思う。このように話すべきことを持ち、それを自身でプロデュースできるような能力のある個人がいる場合は、こちらの設定をこえてもその人のやりやすいようにするべきであると考えた。「記録」のためにはそれが最善であることは間違いない。

2-4 ひゅうこじまぬむんがたり／俵小島の物語

かつては小中学校で地域の子ども相手によく使われていた伝承活動のコンテンツに、昔話がある。いまでは小学校教員の協力も得られず語られる機会もなくなっていくつかの話のうち、この話を語ってもらった。全編シマグチだけで語ったことは袴氏にとっても初めであり、貴重なものとなった。

しょどん（しゅどん）へん／諸鈍篇



図4 会話は基本ダイアログの形式で、地元の人々に出演してもらった（諸鈍篇より）

3-1 うらや うじで うっかな あんまじゃもんや／あんたがおじさんでかあちゃん はばあちゃんだもんね

ここでのテーマは親族呼称である。語彙として必ず必要なものであるだけでなく家族を通じて地域社会への興味・関心のきっかけになる可能性もある。「とうしのゆえ」（歳の祝い）といういまも続く親族・地域社会をまきこんだ祝い事には、あらゆる親族が招かれる

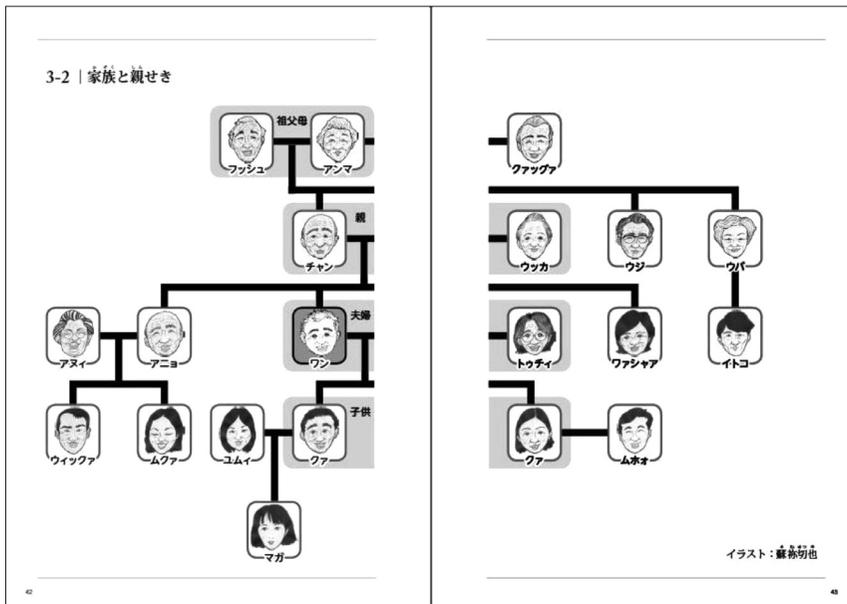


図5 家族や行事など、シマグチが生活に密着したものであったことを伝えることを考えた（諸鈍篇より）

ので、題材としても身近なものである。ただ、年代や集落によって差が激しい語彙群であり、ほかのバリエーションについてどう扱うかという課題は残した。

出演；林京子（編集委員）、徳本明人

3-2 家族と親せき

家系図のアニメーションを作成し、音声とともに可視化することで印象に残るように考えた。しかし本編の中に現れるものと食い違いがあったため、音声処理などに時間がかかった。

声；徳本明人

3-3 しょどん（しゅどん）ぬしょうかい／諸鈍の紹介

古くからの加計呂麻の中心地で、産業や歴史的な文物も豊富な諸鈍であるが、ほかの集落とのバランスをとることに苦勞した。当たり前のように「諸鈍シバヤ」についての語りが準備されたが、シバヤは芸能篇で紹介することにし、シマの暮らしの中で祭りに向けて準備する人々の様子を取り入れた。またかつての封建的な身分制度の上位にあったことを誇るような語りは、映画のロケ地であった話と差し替えた。人々のプライドを傷つけず、かつほかの集落の人々が見ても誤解のないコンテンツをつくることに心を砕いた。語りを担当した上田敏也氏も、諸鈍生まれではあるが、シマグチは学習言語である。

出演；上田敏也

3-4 すいたづくり／砂糖作り

いまも続く産業として、精糖を題材とした。かつては数が多かった製糖業も少なくなる中、加計呂麻では付加価値をつけて高級品として生き残りをはかっている。工程を説明す

るナレーションは動きやそのアスペクトを示す語彙が豊富で、初級よりも上の学習者にはいい教材になり得る。

声；上田敏也、映像提供；寺元薫子、協力；上田製糖所

ゆるへん／与路篇

4-1 だーはちいきゅちな？／どこまで行くの？

与路は離島としての「不利さ」が際立っている。ほかの集落以上に厳しい自然も相まって人口流出が止まらない。その中で人々の生活を描くにあたって海と船をテーマにした。瀬戸内町の子どもでも行ったことがないことがほとんどな場所でもある。そして学習者にとって早い段階から重要なものだと考えられる、移動をめぐる様々な表現はこのテーマと非常になじみがいいと考えた。主要港古仁屋からの距離もあり、今回の制作過程で天候の影響をいちばん受けた集落であったが、瀬戸内の中でも特に特徴的だと言われる与路方言を記録できたことも成果である。古仁屋出身の平田誠氏が、若い旅人役として、流ちょうではないが一生懸命にシマグチを話そうとする姿勢も、本研究の目的のひとつの具体化である。

出演；保島豊、平田誠

4-2 移動をあらわす文

起点、経由、目的地を現す表現と、少しではあるがアスペクトに触れることを目指した。また本文中にはないが、シマグチでは時間の起点と終点を表す表現が、場所のそれとは異なるため、特にとりあげた。

声；徳永允（編集委員）、イラスト；岩元剛

4-3 ゆるぬしょうかい／与路の紹介

与路での撮影がかなった貴重な機会を活かしたと考える。集落紹介のコンテンツとして数年に一度行われるサンゴの石垣の積み替えを計画していたが、台風で与路港が破壊されるなどの損害があって島に行くことが困難になり、復旧作業などに集落の人々が追われ、かなわなかった。そのため与路篇はほかの集落に比べて短くなっている。また当初は保島豊氏によるナレーションを計画していたが、古仁屋に録音にきてもらうことに困難があった。従って自身与路出身である徳永允氏に担当してもらった。

声；徳永允



図6 『シマグチは高齢者のもの』という評価を変えるためにも、若い話者を登場させた（古仁屋篇より）

<p>5-1 かりゆんことうが でけりようおるんにゃ？</p> <p>Part. 1</p> <p>A-1: うがみんしよら。</p> <p>B-1: うがみんしよら。</p> <p>A-2: よしいもればしんことうが ありよすか。瀬戸内ぬこぼ ちやん茶ぼとみどりいうおすか。ぬーかいちやんぼんが ありようおるんにゃ？</p> <p>B-2: いさやせんむんぬぼんが いちやるかやー？</p> <p>A-3: むんがたりぬ ありようおるんにゃ？</p> <p>B-3: 島尾敏雄や しゅちやんにゃ？あんた 何年生な？</p> <p>A-4: 中学校2年だりようおる。なや さちやんことうやありようおすが ゆだんことう ありようおるらん。</p> <p>B-4: 島尾敏雄が ぬが加前島に うたんことうしゅちやんな？</p> <p>A-5: いくさんあたんとさん おもゆたちん さちやんことうがありようおる。</p> <p>B-5: うがし。じゃんかなん 瀬戸内なんていしんことうが いくさぬむんが たりになつとる。</p> <p>A-6: 何歳ありようおるかや？</p>	<p>5-1 借りることができますか？</p> <p>Part. 1</p> <p>A-1: こんにちは。</p> <p>B-1: こんにちは。</p> <p>A-2: 教えてほしいことがあるのですが。瀬戸内を題材にした本を探しています。なにかいい本はありますか？</p> <p>B-2: どういう種類の本がいいですか？</p> <p>A-3: 小説がありますか？</p> <p>B-3: 島尾敏雄は知っていますか？あなたは何年生ですか？</p> <p>A-4: 中学校2年生です。名前を聞いたことがありますが、読んだことはありません。</p> <p>B-4: 島尾敏雄がなぜ加前島にいたか知っていますか？</p> <p>A-5: 執筆中にいたということは聞いたことはあります。</p> <p>B-5: そうです。だから、瀬戸内を舞台にしたものは、執筆小説になります。</p> <p>A-6: 何歳ありますか？</p>
--	--

図7 シマグチは今でも使えるものであることを、日常の話題で示した（古仁屋篇より）

5-1 かりゆんことうが でけりようおるんにゃ？／借りることができますか？

古仁屋では場面重視のコンテンツを考えた。図書館というなじみのある場所、島尾敏雄や元ちとせという瀬戸内に縁の深い人物を登場させるなどの工夫をした。また現役の中学生を登場させることで、子どもたちとシマグチの距離を近づけることを考えた。図書館職員役の義永氏も、伝統的なシマグチはできない世代であるが、事前に練習をして臨んでくれた。

出演；秦珠奈、義永将晃

5-2 動きをあらわすことば

文法的なパラダイムを示してみた。シマグチの動詞にももちろん活用があることを理解してもらえれば成功である。文法事項の教え方が難しい、子どもたちの集中力が持たないと言われていた中でのひとつの提案である。

出演；秦珠奈

5-3 シマジマぬくとうば／いろいろなシマのことば

このパートは、古仁屋の集落紹介にあたる。既述のように、古仁屋はほかの集落との決定的な違いがある。近代以降都市化が進み、古仁屋以外の出身者が人口の大半を占めている。そのことが古仁屋の特色であることをわかりやすくするために、今回取り上げなかった集落の出身者で古仁屋在住の人々に集まってもらった。コーディネーターは徳永允氏であるが、特にその点について話し合いをしていなかったにもかかわらず旧村それぞれから一人ずつ協力者を選んでくれていた。2.2で述べた「地域性」に配慮されていた。元町長で伝承活動の象徴的存在でもある義永秀親氏を迎え、トラブルはあったが、長時間の談話が記録できた。書き起こしは大変だったが、ねらい通りのものになった。

出演；義永秀親、中島良、川上ムツ子、昭島良江

6. テキストの編纂

DVDをメインにした映像教材としたため、テキストは副次的なものとして位置づけたが、制作についてはかなりの労力と時間をかけた。「テキストがある」ことは、その存在自体が瀬戸内の人々の意識に訴えかけることは大きいと思う。地道な作業の積み重ねであったが、共同研究者の高嶋主導で完成した。あくまでも「瀬戸内の子ども向け」であることを目指し、瀬戸内町や奄美語についての基本的な情報は記載しなかったため、瀬戸内町の外に配布するぶんについては、簡単な解説を挿入した。(巻末に添付、資料2参照)特に気をくばったのは、シマグチ部分の「分かち書き」である。共通語の「音節」の感覚では、聞き取りにくいという理解が編集委員との話し合いの中で確認できたからである。句読点もいれにくいいため、分かち書きで対応した。

7. おわりに

当初研究の目的としたもののうち、最優先課題であった「教材の作成」については、多くの協力を得ることができ、ひとまず完成させた。もちろん様々な課題があり、これで終わったとは考えていない。研究目的のうち、現場での使用を想定して制作するというものを同時に掲げていたが、地元編集委員との話の中で断片的にその観点で話がされることはあったが、スケジュール的に教材そのものの制作に気持ちも労力も集中せざるを得なかつ

た。まとまった話し合いができる可能性があった第二回編集会議（9月16日予定）も台風のため中止になった。計画には入っていた教材を試用する機会を得て、そこでの意見を反映させる計画も実際にはかなわなかった。そういう意味でもこの研究は途半ばである。

今後この研究を続けていくにあたって、上記の課題をクリアしていくためになすべきことは、まず「使ってもらう」ことである。現在中央公民館の町民向け講座にシマグチのプログラムを用意するためにはなにが必要かの検討に入っている。各集落の子ども向けプログラムの活性化のためにできることも同時に考える。教員が積極的ではない伝承活動、という話を聞いてはいるが、実際に小中学校の教員と話し合った機会も多くはなかった。

いずれも、この「瀬戸内のシマグチ」ができあがったからこそ踏めるステップである。使いながら作り込みをしていく作業をじっくりやっていきたい。その上で続編の制作も考えられる。

また、「瀬戸内のシマグチ」を素材としてさらに焦点を絞った「教材」を考えるための研究会を東京外大内外の研究者をメンバーにたちあげる計画である。いろいろな人の手によって使われ「揉まれ」てこそ、よりよいものに育てていくことを目指したい。

3月2日に古仁屋で開催した完成披露会は、編集委員、協力者、行政・教育関係者、研究者が集まって、にぎやかなものであった。全編を試写するには時間がかかるので、ダイジェスト版であったが、町の人々は喜んでくれた。

報告書の結語としてはふさわしくないが、ここはひとまずの到達点で、次への出発点であるということを「瀬戸内のシマグチ」を前にして強く感じている。

【参考文献】

- 西村富明 1993『奄美群島の近現代史』海風社
- 西村浩子 1998『南西諸島における方言禁止の実態に関する調査報告』松山東雲女子大学言語文化研究会
- 前田達朗・白岩広行・牧野由起子・中村宏子 2006「奄美大島の言語文化をめぐる伝承活動の報告」『薩南諸島におけるネオ方言（中間言語）の実態調査』第3部 平成15-17年度科学研究費補助金報告書
- 前田達朗 2007「奄美大島瀬戸内町における『シマグチ』伝承活動 人びとの言語意識の手がかり」『多言語社会研究会年報 4号』多言語社会研究会
- 前利潔 2004「奄美の近代」松本泰丈・田畑千秋編『奄美復帰50年 ヤマトとナハのはざままで』南方新社
- 「編集会議」と「完成披露会」の記事 <http://higyajiman.amamin.jp/c8832.html>
- 南海日日新聞 9/15 付け要約 <http://www.nankainn.com/kiji/back12-0915-0921.htm>

資料1 第一回編集会議レジメ

(斜体は会議中の発言などを会議後加筆、→以降は審議、決定事項)

「瀬戸内のシマグチ」全体構想(案)

東京外国語大学

前田達朗

高嶋朋子

1. コンセプト(案) (まえがきあるいは紹介用)

<こどもむけ>

「シマグチ」は、奄美にしかない世界中でたったひとつのことばです。

島唄や昔話の中だけではなく、毎日の生活にとって大切なものでしたが、話せる人が少なくなりました。でもシマグチは、お年寄りだけが使う昔の古いものことばではなく、今もみんなのものです。

このDVDとテキストは、ひとりでもみんなでもシマグチを練習できるように、工夫されています。家族や友達、そして地域の人と一緒にシマグチを使ってみてください。きっと新しい発見があるはずです。

「シマグチが使えて楽しい!」と思ってくれる人が一人でも多く増えることを願って、私たちはこのDVDとテキストを作りました。

<大人向け>

「瀬戸内のシマグチ」は、こどもたちが家庭や地域の方と共に、楽しくシマグチを学ぶためのテキストとして作成されました。

シマのことばは地域の豊かな文化として守られるべきものでしたが、残念ながら、若い世代では話せる人が少なくなりました。しかし、島唄や踊り、昔話などは現代にも息づいており、シマグチは決して忘れられることはありませんでした。

シマグチは大切な財産です。生活にシマグチが結びついてきた時代を覚えていえる人たちのことばを残し伝え、シマグチを次の世代に引き継いでもらいたい、という思いで私たちは「瀬戸内のシマグチ」をつくりました。

一人でも多くのひとがシマグチとシマのことに興味を持つきっかけになれば嬉しいです。

2.内容案

○全体構成

		<集落名>	<会話教材>	<シマの紹介>
	1-1	篠川	食料品店	八月踊り
DVD①	1-2	古仁屋	雑貨屋 図書館	いろいろなシマの出身者
	1-3	俵	公民館の民具	公民館の民具
	2-1	与路	魚、船 船着場	
や DVD				製糖 やめる? 水田?
②	2-2	諸鈍	親族呼称	→製糖で確定
	2-3		物語・芸能編	

- ・各セッション 30 分
- ・両 DVD とともに全 90 分
- ・単語を増やすにあたって、数詞や指示代名詞などともに地名を取り上げる
- ・敬語を取り扱う教材も作る必要がある
- ・シマの紹介の題材選びは文化財等よりも生活している者としての“シマの紹介”がよい

○会話教材部分（10 分）

- ・名詞文から始める
- ・単文のみで構成する
- ・動詞の活用はテンス（時制）・アスペクト（相）まで
- ・会話に出てこない単語も積極的に解説などで取り上げる
- ・特に難しい発音、アクセントを含む単語をとりあげたい
- ・各シマの発音、アクセント、呼称などを尊重する
- ・発音時の口元のアップを取り入れる →取り出して入れればどうか→編集的に難しい

○シマの紹介（20 分）

- ・各シマの簡単な紹介（位置、歴史など）
- ・各シマの特色を考慮した紹介（遺跡、自然、産業、芸能など）

○ 物語・芸能編

- ・島唄、諸鈍シバヤ、油井豊年祭、口承伝承など
 - 元ちとせ、徳原大和、西和美らの瀬戸内出身者に出演依頼できないか
 - 一部実現。元ちとせは事務所の権利関係で難しかった

3. 作成にあたっての留意点

○コンテンツ（内容）と言い換え

- ・集落を表現するものとして適当か
- ・撮影が可能か（出演者、撮影場所、時期など）

○スクリプト（台本）

- ・発音についての表記を統一する
- ・教材としての狙いを反映できているか
- ・学習者にとって役立つか
- ・撮影時に台本が変更されていく点については積極的に
- ・絵コンテを作成する必要性が高い

○編集

- ・委託先（iLand 代表：岩元剛氏）と緊密に連絡をとりながら作業をすすめる

○DVD 作成・製本

- ・業者を東京外国語大学国際日本研究センターで選定のうえ委託

4. スケジュール

2012年5月	検討会議	撮影(篠川)
6月	編集作業	
7月	編集作業	撮影(古仁屋)
8月	検討会議	撮影(俵・与路)
9月	撮影(諸鈍及び予備日程)	
10月	撮影(諸鈍)	
11月	編集作業	
12月	編集作業	
2013年1月	編集作業	
2月	撮影の予備日程	
3月	瀬戸内町での発表会	

5. そのほか

制作に関する経費は、博報財団の研究助成金および東京外国語大学国際日本研究センター（前田・高嶋の所属部門）から支出される。

そのため制作者は「瀬戸内のシマグチ編集委員会」であるが、「博報財団」「東京外国語大学国際日本研究センター」を併記することをご了承願いたい。了承得る

資料2 瀬戸内町内配布ぶん以外に添付する「解説」

「瀬戸内のシマグチ」とは

奄美大島南部瀬戸内町のシマ（集落）のことばを、次の世代に伝えることを目指し、地元で長年にわたり伝承活動に関わって来られた方々と、東京外国語大学国際日本研究センターのメンバーが、2012年に編集委員会を結成し、制作した映像教材です。（公財）博報財団の研究助成を受けています。

奄美の歴史的背景とシマグチ

奄美では、昔からのことばをシマグチと呼びます。その名前からわかるように、シマごとに少しずつ特徴があつて、ことばを聞いただけで、その人がどのシマ出身かわかったそうです。しかし、学校教育が始まってからは方言が禁じられました。学校から始まった、時には罰を受けることもあった「方言矯正」は、シマの社会にもひろがりました。薩摩時代に植民地的な産業構造にされた奄美からは、多くの人が阪神間や東京周辺に仕事を求めて移り住むのですが、シマグチは笑われ、馬鹿にされました。この経験はシマでの方言禁止をさらに進めることになりました。このことはシマグチを話せる人が少なくなった原因のひとつだと、地元では考えられています。この「瀬戸内のシマグチ」の存在は、かつて禁止されたものであったシマグチに対する人びとの意識がかわるきっかけになると考えています。

シマグチの特徴

シマグチは、沖縄本島などと同じ「北琉球方言」に分類されます。琉球語の奄美方言と呼ばれることもあります。ユネスコの「世界危機言語地図」(Atlas of the World's Languages in Danger)にも「奄美語」(Amami)として日本の危機言語のうちの一つとしてあげられています。語彙だけでなく音(音声・音韻)や文法など、あらゆる点で日本語(共通語)とかなり違います。特徴的な音をあげると、母音で、舌が歯ぐきにふれていない音(中舌音)、喉を締めて出す音(声門閉鎖音)、「ぐあ」などと書かれる音(合拗音)などです。共通語においては、今では「を」は「お」と同じ音になりましたが、シマグチにはその使い分けもはっきりと残っています。こういう点からみても、シマグチはかなで正確に書き表すことは不可能です。それが「瀬戸内のシマグチ」で私たちが映像にこだわった理由です。シマグチの生きた音を、残せる機会は今後ますます減ることが予測されます。シマグチを「記録する」ことも私たちは考えました。

瀬戸内町のシマグチ

奄美大島南部と三つの有人島からなる瀬戸内町は、1955年に三つの村とひとつの町が合併してできました。それぞれのシマに伝統と歴史がありますが、1980年代から子どもたちがシマグチを話さなくなったことに危機感が持たれていました。地域での伝承活動もこの頃から始まったと言われていますが、1996年から開かれている「子ども島口大会」をきっかけに、校区やシマの公民館活動として、こども向けの伝承活動が本格的に行われるようになりました。しかし、先生役のシマの人々は、個人の努力と手作りの教材で、子どもたちを指導してきました。こうした地域社会でのシマグチ伝承活動に役立ててもらうために、「瀬戸内のシマグチ」は企画されました。また、奄美の外に住んでいる奄美出身者の方々にも役立てていただこうと考えています。

「瀬戸内のシマグチ」の構成

今回は篠川、俵、諸鈍、与路、古仁屋の五つの集落を題材にしました。そして、瀬戸内出身の島唄の唄者（うたしゃ）三組と伝統芸能「諸鈍シバヤ」を題材に芸能篇もつくりました。瀬戸内だけではなく、**奄美の豊かな文化資源を絶やさないためにもシマグチの伝承を途絶えさせてはいけない**と考えています。集落で収録したものは、大きく三つの部分に分かれます。まず一つ目は、台本を演じてもらった会話。二つ目はその会話での重要なトピックの取り出しをした部分で、三つ目はシマの方に語ってもらう部分です。今回は特に「こういった使い方をしてください」ということを、細かく決めませんでした。それぞれのシマで、この「瀬戸内のシマグチ」を自由に使っていただくことを考えたからでもあります。DVDのコピーも制限していません。付属の書き起こしたテキストも、コピーしやすい製本にしました。私たちは、「瀬戸内のシマグチ」を教科書としてではなく、**シマグチ教室のための素材提供**と考えました。

2013年3月

「瀬戸内のシマグチ」編集委員会

前田 達朗